

繪本通俗三國志

二編

七

特
21
221
17



於
221
19

東京
大學
印

印

繪本通俗三國志二編卷之七

あぢんつうぞくさんごくしよへんぶきのしち
繪本通俗三國志二編卷之七

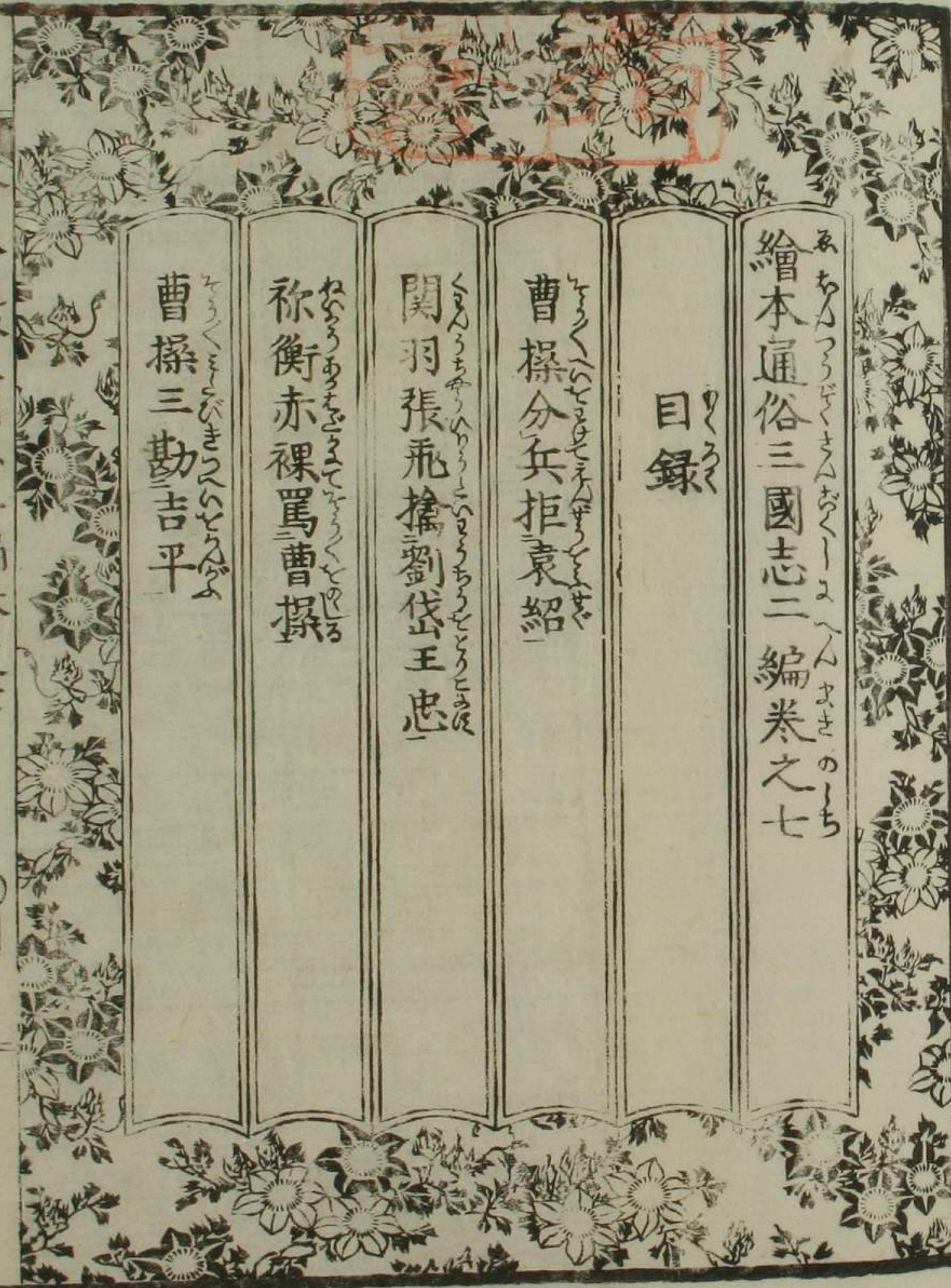
目錄

曹操分兵拒袁紹

関羽張飛擒劉岱王忠

祢衡赤裸罵曹操

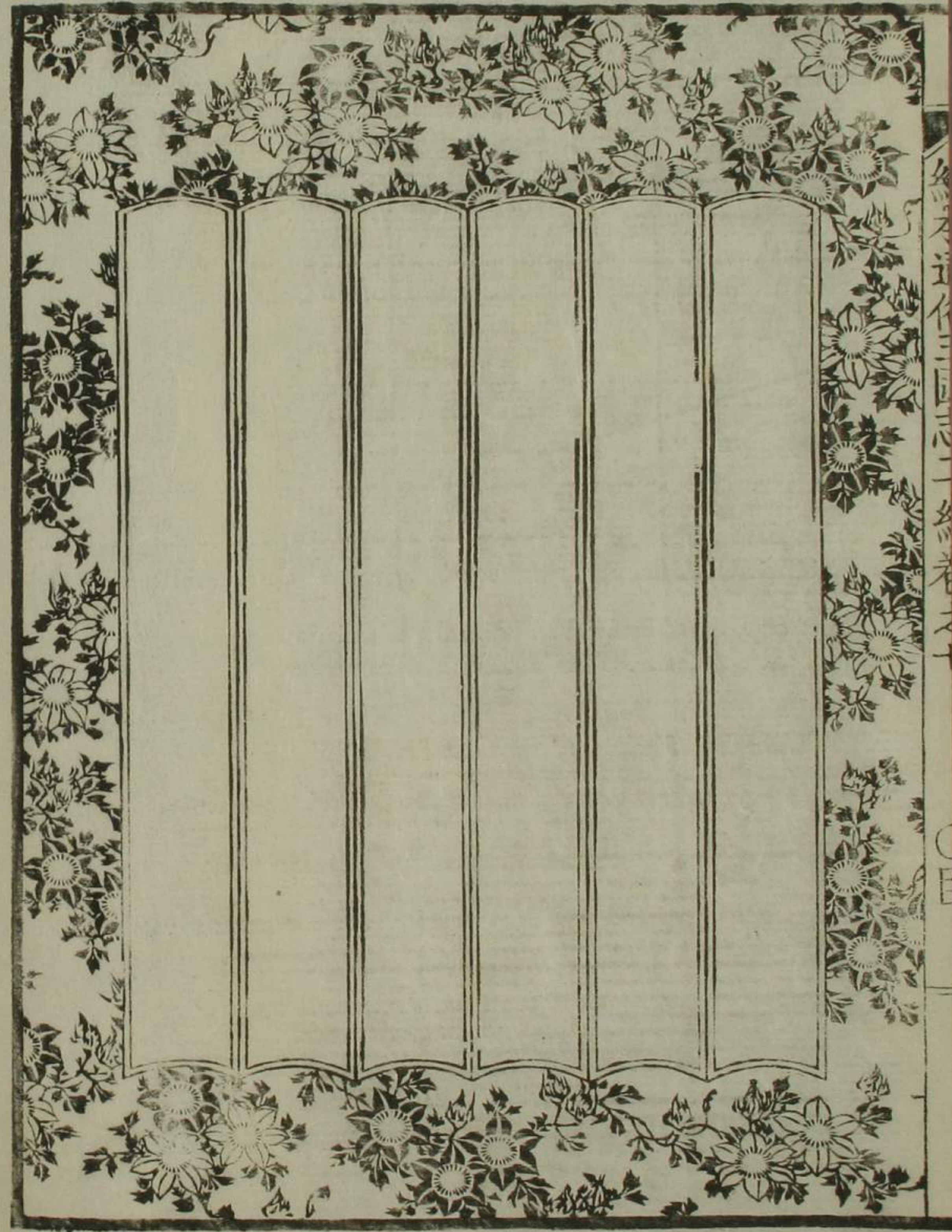
曹操三勸吉平



繪本通俗三國志二編卷之七

曹操分兵拒袁紹

玄德とては徐州の城に入と。去りて曹操がひまらんとと。心せぬ
 へ陳登のるる。曹操が常々畏多うとの河北の袁紹あり。いま袁紹
 四州と保ちと。精兵百万。文官武將雲霞のどし。そや出づと
 送りと。御頼とひや。曹操たとい来ともかんの心せり。とて玄德の
 曰。まこととてあはれども。曾々好も結ばず。あまのさへ弟の袁術と
 のまこととて減おせり。くく。涼は怨おれを。今いでう我ととく。陳
 登が曰。まの處に羊老とる官人あり。桓帝の御時。尚書たり。い
 康城高密の鄭玄といふものあり。まの人袁紹と。三代の通家あり。
 まのまこと頼むひと。袁紹は出づと送り。やばり。あはれか人玄



三國志

繪本通俗三國志二編卷之七

徳公の養子從之陳登とらふ鄭玄が家を行右のあむきと若て
再拜して頼むべ鄭玄欣名とて出方と潤入玄德いと
その書とゆへに孫乾と河北ははるかそ救とゆへ好むむがくを
ゆへ袁紹對面と鄭玄が出方とこんよとの書と曰

伏聞漢道凋零奸臣強暴外無匡扶之柱石内無伏策
之棟梁賊臣曹操幽帝許都社稷傾危生靈塗
炭惟明公世居相府天下仰之若天旱而望雲
霓如久涉以思天日倘與劉玄德協力同心共立
伊尹周公之績名垂青史萬代不磨區々之志
百心聽察焉
袁紹とありとやるる玄德が弟とあろせり我常は仇と報せ

んと何くんと好むむとを孫乾の玄德は袁術と
拒むるはまをねらち天子の勅命と傳へて曹操があさしむる
ころありいま將軍と從ぐともは力とあはせ漢室と匡正と
曹操と討つんとわつと死にま察しぬ袁紹が曰く
より玄德の世の英雄あるとあるふり志しと改めと
を我らあはれとて手ての大將ととぐくあはれ大軍
と起すと都より漢と扶と曹操と滅ぶさんと議する
出と此事あるべしといふ諸人あまそこれを英傑衆と超見識
高明ある鉅鹿の田豐字は元浩といふものあり
羊の合戦打続ひて百姓とあはれ倉廩と時ありと賊
ととさるるのまを國の涼地憂ひありたゞよろしく朝廷と貢物

會天通卷之三十三編卷之二

捧げ農と務ら民と安んぶと。そのち時と待て兵と黎陽と屯ら。
 河内は舟と化りと武具ととの精兵と諸處をか邊境と襲ひ。
 曹操が兵やとたとる。三年の内は、わが定まらん。とれは
 一人まきと出で曰ふの計策もが意よりあはれど諸人はまきとこれを忠烈懐
 慨相白端莊はる魏郡の審配字は正南といふものあり田豊はむらと
 ころの兵書の法十田五攻敵さるとたはく戦ふ。いま主公の神武
 河北の精兵と率つて曹操と伐むんと。尚書の内はあり。あんどいづ
 らは月日と送らん。延引せば後悔とも及まじ。又一人まきと出でい
 やくこの計事とるべしと。諸人はまきとこれを廣平の沮授と
 審配はむらと。ころの乱とまきと。い暴とのどく。まきと義兵と
 いの衆と恃と強は傲るまきと。驕兵といふ義兵は敵は勝驕兵はあ

らと滅ぶ。いま曹操漢の天子と許昌と遷し。勅命と号し。天子と
 制さ。その名義兵は似り況んや妙勝の計畧と用と強暴と恃ま。
 法令より行はれ。士卒精練あり。あは公孫瓚とたのあなま。
 いま万安の計事とまきと。無名の師と起さん。まきと自滅とまきと道
 あり。とれは郭圖とまきと。御辺の意見相違せり。むら
 武王の討と伐む。天子と不義とせ。況んやいま曹操
 と伐む。無名の師といふ。主公四州の強とまきと。軍士精練將
 校奮勇あり。まきと。大業と定ま。後より入る。害
 あらへ。まきと。天の兵と取ま。禍と受の理あり。ま
 れをぬ。越の覇する。人。吳の亡る。人。戦の村の
 操と。変。應。と。鄭。女。の。旨。は。従。ひ。玄



孫乾^{そんかん}の
使^{つかい}
河^か北^{ほく}へ

孫乾^{そんかん}の使^{つかい}河^か北^{ほく}へ

孫乾^{そんかん}の使^{つかい}河^か北^{ほく}へ

徳とまぬひと。ともにかと係曹操と滅せしむ。上の天意よりふ以下
人情は順ひあへんと。四人の議論まらふ。袁紹もいふ。汝を
さうねふ。勿まち外より許攸荀慈二人きたまひ。袁紹は汝二人ま
く討つ。いま鄭玄去る。送りて兵を起し。玄徳とさふ。曹操と
滅せといふ。はさきよりと議論する。田豊と沮授といふ。兵を起すと
あふ。さきとといひ。審配と郭図といふ。兵を起せといふ。汝二人
とのつ。決さへ。元來は二人田豊沮授と不和。一と。郭図は
さく。睡まむ。わらさく。郭図がいに目く。せさる。とん。との意を快
り。則ちさや。さる。古より天の兵を。取され。之。河。其。受と
の。り。の。多。及。上。り。五。な。を。ん。曹。操。を。寄。つ。る。べ。し。先。ん。ど。と。た。人
と。制。と。う。あ。る。と。延。引。あ。る。べ。し。と。袁。紹。は。ま。さ。に。決。し。と。争。却。

へ。ひ。上。る。べ。し。と。さ。は。さ。方。と。と。と。孫。乾。と。回。審。配。逢。紀。と。徳。大。將。と。
田。豊。荀。慈。許。攸。と。謀。士。と。顔。良。文。醜。と。先。手。と。一。騎。馬。の。勢。
二。万。歩。上。の。勢。八。万。都。合。十。万。の。精。兵。と。と。り。と。黎。陽。と。は。進。兵。
ま。よ。の。と。は。曹。操。の。都。は。あり。と。玄。徳。と。さ。車。曹。と。あ。ら。し。袁。紹。と。
の。ん。ど。大。軍。都。へ。及。上。り。と。さ。き。い。と。大。驚。た。諸。大。將。と。あ。つ。り。と。い。ふ。
と。と。評。論。と。と。は。北。海。の。大。守。孔。融。將。軍。に。任。せ。ら。れ。と。都。に。還。
向。ら。る。が。ま。の。す。と。と。え。い。と。は。曹。操。に。見。へ。と。り。ら。る。の。袁。紹。の。勢。か。ひ。大。な。
し。と。か。ら。ど。く。敵。が。さ。う。ん。と。さ。う。に。交。り。と。む。と。さ。と。和。睦。と。い。と。め。
曹。操。諸。人。に。ひ。つ。と。や。ら。る。の。和。睦。せ。ん。と。戦。ふ。ん。と。い。づ。と。味。方。の。
利。あ。る。ん。荀。彧。と。さ。と。曰。く。袁。紹。の。無。用。の。人。あり。一。戦。し。と。打。破。べ。し。
う。あ。ら。ば。和。睦。さ。ら。る。べ。し。孔。融。曰。御。辺。の。言。大。に。誤。り。吾。ち。の。ま。ま。袁。紹。の。

困ひる。民強くして田豐許攸が徒智謀ふるく。審配逢紀すく
 兵を用ひ顔良文醜勇あつたものほ。その外沮授郭圖高覽張
 郃淳于瓊ホこまき世まられる谷士あり。あつたは極く下り
 荀彧笑とふる。足下只その二とあり。その二とありむ。袁紹兵
 多しといふ。法そののむ田豐の剛より上と犯し許攸の貪りを知
 る。審配のめつらより計策を。逢紀の果より用ふる。ホの人
 へたひは軍をい妬んで。あつた内変と仕出さる。顔良文醜を匹夫の
 勇ありた。一戦して生取せん。その外碌たる小おなたとい何百万ありと
 もあつた道は足んや。あつたのめ入る袁紹と無用の人とや。ありといひなれを。
 孔融言る。閉口と曹操大に笑とふる。あつた荀彧が智
 囊と洩すとふ。そつ用意とせむのこと。前後兩營の官軍と起。ま

劉岱王忠二人は五万の勢と授とせし丞相の旗と指せ。徐州は向
 川の玄徳とひさせ。みづから二十万の勢と率。黎陽は出で袁紹
 と妨げんとせ。程昱諫めとゆる。劉岱王忠の玄徳が對手不足
 と別。まらる大將とえび。曹操ゆるる。あつたは是と
 志まり是故とせし。丞相の旗と立て。みづからむる体と
 せし。あつたは玄徳と畏とせ。あつたは戦う。味方の
 陣と構へ。あつたは山間とせ。袁紹とあつた。勝
 る乗とせ。徐州へあつた。玄徳の外の援とせ。容易生捉へ。あ
 つたは黎陽は出で。屋と構へ。袁紹と八十里へ。あつたは互ひに要
 害とせ。あつたは守とせ。出で戦う。あつたは八月より十月まで。あつたは
 あつたは暮る。あつたは伊人といふ。あつたは逢紀。あつたは審配

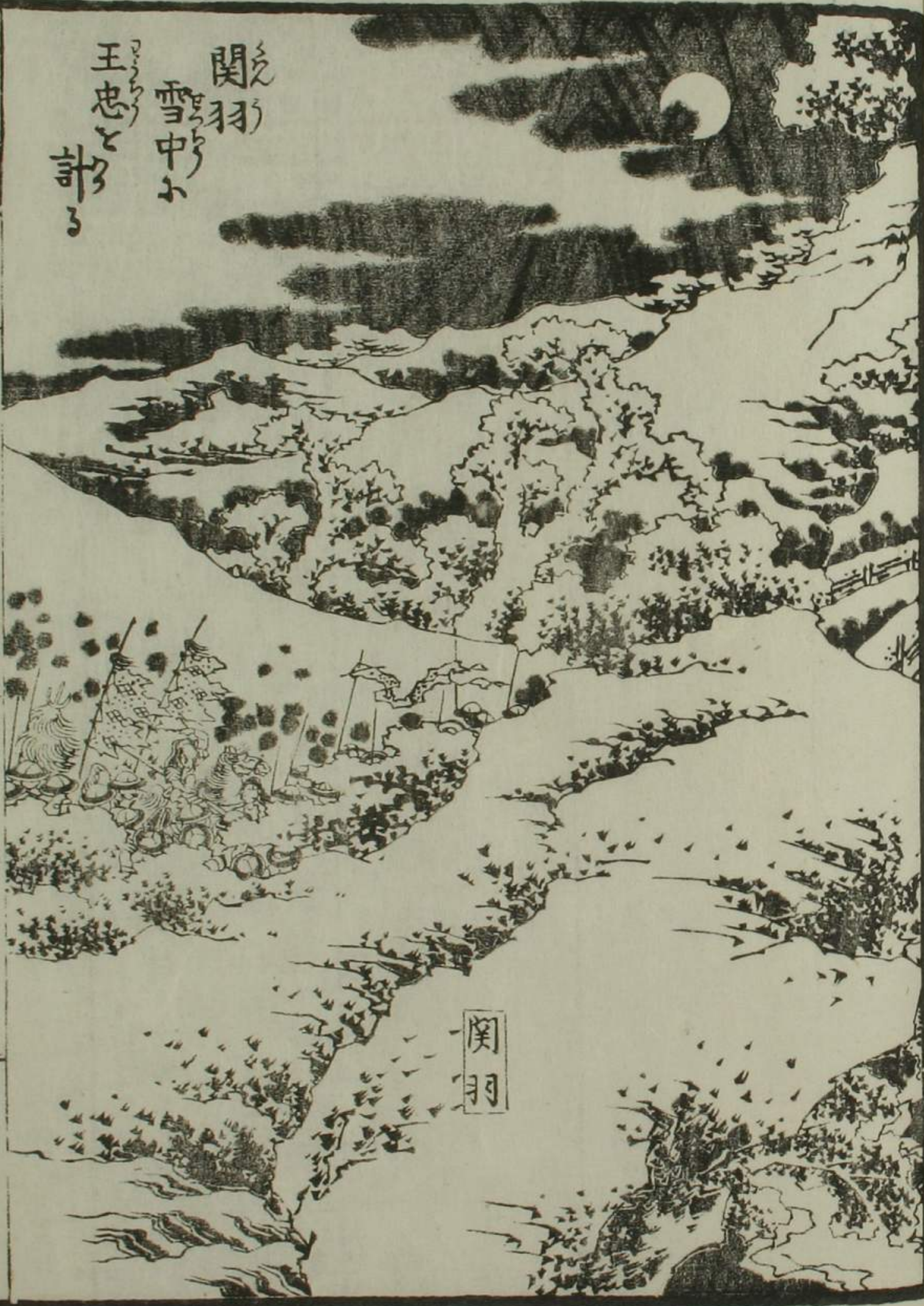
會集... 二二...

とく人々將より。ぐぐ沮授うぬ。審配と恨むるあやまると審配が計策と用とを遂に不和あり。袁紹の疑がひ感く。くんと戦ふことあめ。二度も出ることあり。曹操まれば。これをアと内変と生じ。けり。袁紹さだめをめぐ。ひ来ることある。自らなるわ。益あり。と。臧覇とと。青州徐州の界を。まもらせ。于禁。李典と河上。曹仁と。大將と。官渡の難處。陣とと。二軍と。都へ。回り。くる。

関羽張飛擒劉岱王忠

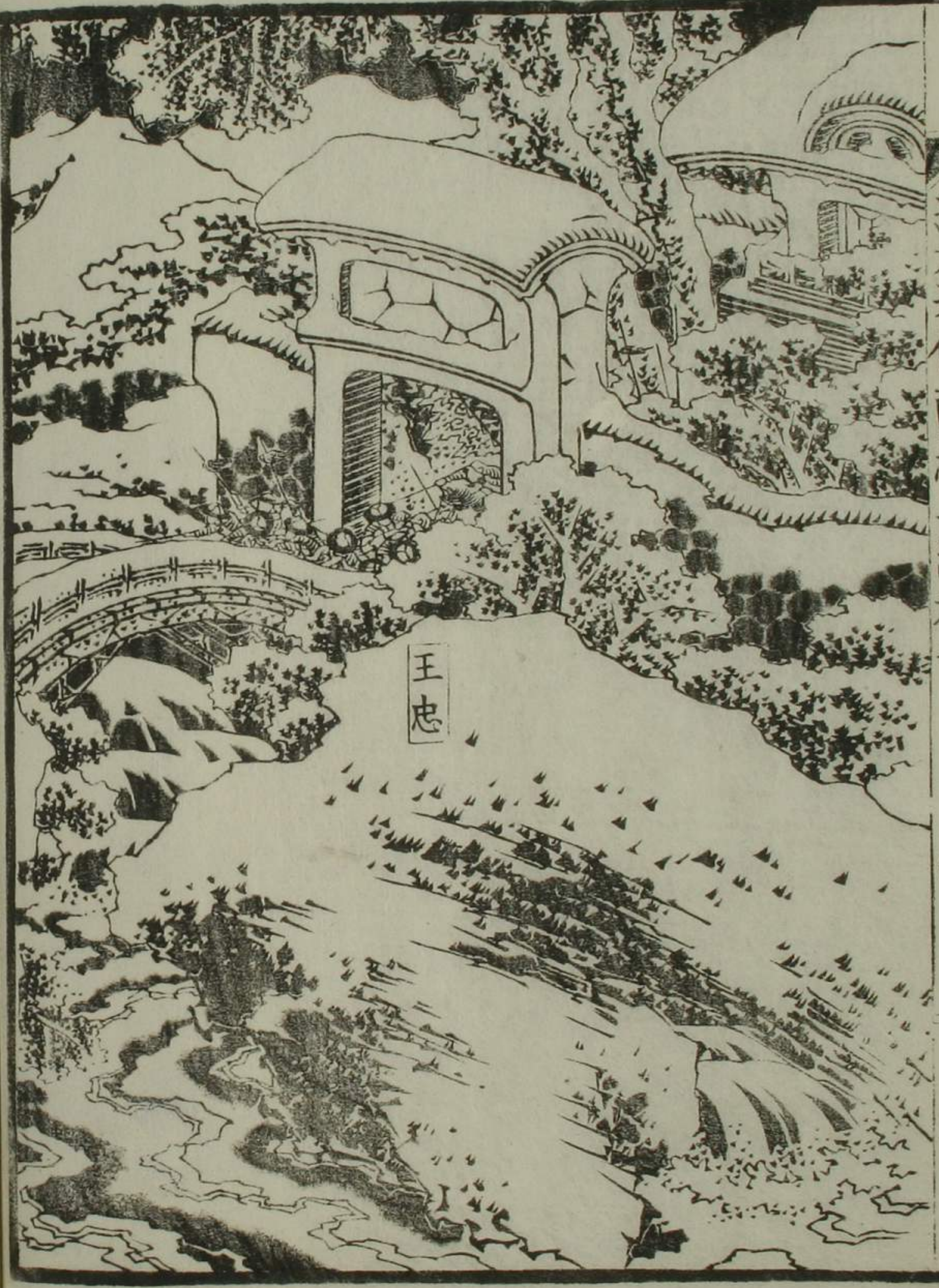
劉岱王忠二人の五万余騎。徐州と百里へ。陣ととり。中軍の丞相の大旗。と。曹操が。と。披。あ。め。く。と。日と。送。り。居。る。思。い。曹操

使と絶と。を。や。に。及。蒐。と。と。催促と。劉岱。ま。ま。ひ。王忠。む。む。や。れる。丞。相。を。中。戦。ひ。と。も。ま。御。辺。を。二。軍。と。敵。の。虚。実。と。あ。ろ。め。王。忠。の。都。と。生。る。と。丞。相。若。る。御。辺。と。計。事。と。扱。け。ゆ。り。い。ま。ま。と。我。の。讓。め。と。劉。岱。の。我。の。陣。の。大。將。軍。あり。あ。は。し。く。敵。を。む。か。ん。や。王。忠。が。白。さ。ふ。云。む。いと。ま。ま。と。御。辺。と。官。爵。は。高。下。は。何。ん。ぞ。御。辺。の。下。は。馬。を。詮。一。度。は。打。向。へ。曹。操。が。使。ま。と。と。二。人。争。ひ。と。あ。い。か。何。ん。ぞ。玄。徳。の。敵。ま。と。と。得。ん。兵。と。二。手。は。か。と。關。と。と。打。向。へ。二。人。の。ま。ま。と。關。と。と。り。る。王。忠。先。の。字。は。あ。り。れ。兵。と。進。り。と。徐。州。の。城。は。は。蒐。る。玄。徳。敵。の。寄。る。と。と。陳。登。と。計。事。と。議。し。も。は。陳。登。の。袁。紹。十。万。の。兵。と。起。し。と。黎。陽。ま。と。牛。れ。と。



関羽
雪中
王忠と
計る

関羽



王忠

ちんごんをゆく降ざる関羽が曹操わら馬とせ。まき對面して
 一言と言え王忠が曰く曹丞相あんど狂しく。你がとたもの對面
 かん関羽た怒り馬と飛して討てがたれ。王忠も鎗をひかりて二
 合戦ふ。関羽詠りて逸走ふ。まきあ一回せとて山際輝て
 来りぬれを関羽まきと取とつて号ひとかけふ。王忠駭た怖れと
 走りぬると関羽刀を左手に持右の臂とにのぐと王忠鎧の上帯
 と松ん中よりつてけ。脇をぬんと回りぬれをその勢ぬの拍きて
 せんぐ走りぬると関羽が三千余騎いたわひに乗て追蒐馬と奪と
 救百疋あり関羽いと死王忠とまがりて玄徳の前に出れを玄徳問て
 曰く你あまものを誅りて曹丞相とや。ちるぞ王忠答て曰くま
 かんぞ誅ぬん丞相もまきと命とと旗をとりて立と疑兵の計とぬ

び丞相の袁紹とまがりぬり不日まきと你ホと生取のふ。玄徳
 をぬらち衣服とあえ酒と飲せととあえ。又劉岱と生取んと誅
 ぬん。関羽やるるのまきと兄の曹操と和睦とまじの御んあせ
 たりりと王忠と生取まきとれり。まきと斬ととてん玄徳の曰我
 まとまあぬあり張飛が性さかまきと。まきと王忠とまきとと思
 ぬれが行んとぬりまきとと。まきとホのまきとと。まきと益あ
 るまきと生とととたを曹操が怒と休るとあふ張飛まきと出
 てやるるの某あひと劉岱といひまきと来まきと玄徳の曰く劉岱を
 ひし兗州の刺史といひと。虎牢関とと董卓と戦ひてぬ。
 うるんまきと敵まあふ張飛が曰まきとわどの奴原あんどいふまきと
 まきと即時ぬ松んと持まきと。玄徳の曰まきと。你まきの跡まきと

彼とありきと患張飛大腹と立ちまゝと死す我とあり
 んどぞ。躍がりくといひゆゆ。彼とありき。我とありき。命と
 償ふべしと。ひららりと。三千余騎と率し。打生りありと。死
 劉岱王忠が生捉まじ。騎ひと。陣門と守りて居し。二
 張飛直ちありと。勢ひに乗て。やぐんと。劉岱よりく
 張飛と怕ま。教見あり。出たり。張飛元來性躁。ま
 しく。とふ。林ぬ大将を敵の出る。退屈し。さるべし。悪
 口とありき。心の内。ま。計と案。半。今夜の三更。敵
 陣と打討ま。その用意とせし。手勢の。相觸。其のあり。い
 たり。酒と飲。詐り。大に酔。体とふ。各も。死士卒
 と。さるべし。打擲し。陣中。ま。後。首と斬。旗と祭り。

軍の首途。具へんと。罵り。ひと。友の命。細と。いひ
 たり。士卒。遇る。責。恨と。舎ん。劉岱は
 降参。事乃。あり。の。ま。告。劉岱。の。詭
 あり。あ。信。ざ。の。士卒。全。打。血。を。を
 んと。初。張飛。例。際。暴。今。伏。鳴。と。ま。計。成。就。せ。り。と。号。し。と。兵。と。三。手。二。更。の。夜。討。む。と。号。し。と。敵。陣。を。及。二。手。の。勢。敵。陣。の。後。へ。ま。り。と。虚。を。乘。て。責。入。べ。し。と。約。す。ち。ね。も。二。更。の。ま。ろ。を。張。飛。が。劉。岱。が。陣。の。後。に。ま。り。三十。余。人。の。もの。を。喊。と。ほ。り。と。は。し。と。せ。り。と。け

起り引包んと内外より討んとするを思
 らざる陣の後より張飛が二手の勢あやせけんぞは入夫と放門と
 兩の志と。劉岱は案を相凌しと。さへぐみ乱しと。まきと見ると落行と
 あり山の後より張飛二軍と引くと。きりとも馬とまんとた合
 劉岱と引包んと地を切まを回れを降との板とまんとた張飛は元
 のまきとまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 来ものまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 と。まきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 る兄とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 曰く我適ふ言とて位とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 と得人張飛もりたりあく打笑ひ士卒と下知くと劉岱と引

出させられを玄徳馬より飛下るる繩と解と下りしれりるる
 弟あままりと無礼とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 入さるる生取とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 れるる車曹とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 誅戮せり。まのの人の丞相疑ひとまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 る丞相の大恩とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 づんど朝廷とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 あれすしとまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 入さるる擄とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 思ふる。丞相の御前の其二人とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元
 ねらうるべし。玄徳とまきいさうだのまきび関羽とむらとまんとた張飛は元

劉代山王忠とて城とてあまを十里をり生るる勿心然と
鼓のよえ地と動し一手の勢路とさえだる二人獲て之とれ
張飛なり眼とつててやうへ兄ハヤふとてのめ
み別のあるとたぬく生取たる逆賊とやうなることやあ
とと夫ハの予とまかど門と号いと蒐りしれを劉代山王忠馬上
と震るあくわ二人後より馬ととびと出来り無礼とさるあ
ととがりしれを誰やらんとする関羽ありし劉代山王忠とて
しんと安んずと相待の関羽川と来りさやけの兄は二人のめ
とあしとえさしめゆのあをるを渡すととめんとする張飛が白く
いぬあがきと重くと又来る関羽が白く重くと来るがその時
は洙すべし劉代山王忠とて其二人とては活命の恩と

ふむる丞相と其の三族と滅ぶととむ折言と再び来はし頼むが
あど放しめ張飛中なるたとい曹操がとから来るとも一人も生て
の返はじいま権三川の首と你二人のあがけは重くときたるとは
請取ん劉代山王忠肝と頭と来て去りしれを関羽張飛も城
中と回る女徳とされる曹操とあはばとづらひ来らんといは
と妨ぐべし孫乾が白く徐州の敵と受くとくく保ちぐと城と
ありし兵と小沛と屯る下邳の城と守りと犄角の勢をひと
ありし女徳との義とるべしと関羽と妻子一族と死と下邳
城とあめち孫乾簡雍糜竺糜芳と徐州の城ととめと心と
張飛と引具と小沛の城と守りあり

稱衡赤裸罵曹操

會大員台三國志二編卷之廿



劉岱



張飛

張飛
劉岱
搦で
歸陣す

るは徐ろ中々國はうりて袁紹は御辺を骨肉の弟と疑び
 妬んぞ客とあはれど何んぞ天の國士と招く用ると得ん
 るまあんど腰とちめと徐ろ下立人早とせとせと引
 やぬりと逆立たれを張繡よりいまま袁紹の勢をひきとせと
 曹操の弱もあはれ使と逆立るとも袁紹いかりとひきたら
 をとせとあはれとつら妨ぐとと得ん賈詡は其れを意の曹
 操は降ぐんとあはれと張繡は白の曹操とぬれた讒言を
 いまの降ぐと害せると賈詡は白の曹操は降るとたはれ使
 三あり曹操は天子の勅命とせと天とと伝とせと宜はれと表
 紹は強といふと將軍いま降りあはれとあはれと徐ろ下立人
 曹操は弱といふと將軍いま降りあはれと用ひんと宜はれと曹操

は五霸の志ありありあらば私の怨とせとせと宜はれと疑
 ぐとせとあはれと曹操は降りぬ張繡は同じれを賈詡と
 ぬち劉曄と伴ふの来る劉曄對面して曹操は平生の徳と称
 して旧は讒言と思はれとあはれと使とせと招くとせとせといひ
 ぬれを張繡はあはれとあはれと疑ぐとあはれと酒宴と設
 けとあはれとおめしはたの日都はつわりと降来と請曹操は
 出む久張繡は手とせとせと御辺とせとせと降る旧は讒言
 ありともあはれとせと掛んとせと揚武將軍は任んと賈詡と執金吾
 としと酒宴とあはれと悦びと述とせと荆のより使えり劉表と
 まねけとせと疑ひと懐いと徒とせといひと張繡は其れを
 とも襄城とあはれと久と劉表と交りといふとせと井舌の人と

子方あつたどりてとてとて利害と説く論さしむるやちよ末り降
 らん孔融やうら某家平原の祢衡字正平とりよまのあり才
 学極めと高しとて生質そのまのぶとあつて言と出せを人と
 うあんとし此人むしり劉表とまゝなると你と丞相用ひて使と
 り曹操やと生と對面しるふいぬと聖とてあざり「お祢衡を
 ら怒とるん」天と作らと長嘆とて曰く天地の間満ふよんを
 人さしを曹操が白く手下に名士數十人あり當世の英雄あり
 你さよとと人ほ」といふと祢衡が曰く「おの才の群びるるを
 きえ曹操が白く荀彧荀攸とふ智汝く計多かりのあり古
 蕭何陳平もあまは張遼許褚李典樂進の勇あり者
 古の岑彭馬武もあまは呂虔滿寵從事たり于禁徐晃

先鋒より夏侯惇の天才曹子孝の世間の福將你あんと
 かりといふ稱衡あつて笑とやうな御辺の言相違り是ホの人
 人の事をあはれに志れり荀彧の疾と問せ妻と弔いむべし首攸
 の墓と守らむべし程昱の門と守らむべし郭嘉の文と出せ詩
 と作らむべし張遼の鼓と打せ金と鳴さむべし許褚の半馬と救
 しむべし樂進の杖と説しむべし李典の書簡と持せと使しむ
 べし呂虔の刀と磨せ劍と鍛しむべし滿寵の酒と飲せ糟と食し
 むべし徐晃の猪と屠り狗とあはれむべし于禁の背は板と鼻
 と墻と築しむべし夏侯惇と肥ぬれける將軍と号し曹子孝
 と錢をばる太守とあぶくそのろの者たの衣と着るも人衣桁乃
 どく飲とるる人飯囊のどく酒と飲ゆる酒桶のどく肉とく

らぬ肉袋のど」手足と動じ。言と出さるといふもあ人の益うあへん。曹操らまときいん中よ大いいうる能うあるごとと問え。稱衡やるるいりて天文地理の書一とて通ぜざるといふと。九流三教の事曉ふごとといふと。上のつと君と堯舜よふまへく。下のつと徳と孔顔を配べ。内中のつと國と治め民と安んぶるのた。と意を。あは俗子とも論ぜん。張遼よまときいん。ものつと。乃。不う怒り。匠夫いふを無礼の言と出さるといふ。劍と拔てま。まを斬んとする。曹操は「とめと曰いま朝堂に鼓を打役人と欠。近日朝賀の酒宴を稱衡ともちひて。鼓を打しめん。稱衡あへて辞せ。領掌しと去れを孔融もんの中恐れ入る退せ。張遼しるる。丞相ふとと稱衡と斬てまときいん。曹操が

曰まの人のつとより世上は虚名高くと。遠近をまぶるもの。今ま。まをまらさべん。と我と議論せん。彼も「才能はあつと。ま鼓を打とて恥辱とあふるあつと。建安四年八月朔日の朝賀。曹操省臺に上と酒宴とあ。百官とてくあつと。賓客坐。まはらさる。鼓の役人きたりれを稱衡もその中よありらる。つと。堂よのりて。鼓と打。漢陽の三槌と奏し。音節よの常より。りて。ことよ妙よまきこえん。満座慷慨せざるは。やあつと。右の諸大將よあ叱と朝堂の御賀よ。鼓の役人古よりあ。此夜と着る。你あよとてさやうの汚れる衣と着るといひ。を稱衡まよ。ゆさか。あつと。帯とて。破をけられ。衣と座よ脱と。赤裸とあり。全身とあか。立る。満坐のへく

新編通鑑三國志二卷七



興とさあ〜顔とあり〜祢衡のく〜犢鼻褌と者と
まはし顔色と変せど又三通打ひれを曹操叱りて〜朝
堂の内よとあよと無礼と侍らば祢衡が白君とあざむけ上とあ
よと無礼と叱れをいませいませ父母より得たる全身とあつとあ
よとぬら正〜潔だよき人なり曹操が白く你が賢愚と〜門とあ
り〜濁り〜人の何くある。祢衡が白く你賢愚と〜門とあ
り〜濁り〜人の何くある。詩書と読む。まじ口濁るあり忠言とま
ど。まじ耳濁るあり古今と通せど。まじ身濁るあり諸侯と合ると
あ〜だまを腹濁るあり常と友逆の企とあよとま〜濁るあり。ま
い天卜の名士あるよ。你のそ〜鼓の役人と。あよ陽貨が孔子と
害せんと。臧倉と孟子と毀するよ。似たり你霸王の業と〜掛

と〜あよと〜うやうよ人と輕んぶらど。あよまよと〜匹夫の所行ありと。
罵りれを諸大将斬とせんと怒と曹操制と〜あよとまよの
者とあよと〜鼠とあよとに同〜と。祢衡はむらり〜やらる。
你と〜荆州と使〜劉表と親と降〜を。まよ〜必ぬとゆつて
公卿と〜稱衡あよと許容せあり。〜曹操馬と引〜と從者二
人よ扶け乗〜て手下の諸將と酒肴と用意〜と東門のわ
まよと送る〜と下知〜れを文武の諸將と〜と東門よ出け
るが。〜中よ怒と舍と首奪〜る。祢衡よ〜來るとも。ま
よ起〜と送るとあよと〜待らよ。まよ〜と經〜。祢衡
きたれり。諸人平坐〜と起〜と送るものありれを。祢衡よえと
えありと〜大よ哭〜首奪問〜やらる。你いま首途といつと。

時に乘とて中事と起しゆ。又天子の御望るをよるべし。従ひていま曹操を兵と用と名譽の士きとよみ後とて勢ひ。ねたまを袁紹とてよみ之を袁紹と破りてのち兵と東國へう。さびあそむく將軍妨たぬとあこい。と荆州と持るる曹操を従ひむ。うあそむ重く用ひ。まは万全の計よとゆ。劉表疑ぐと。さう決せ。やありと曰く。你まが都よのなり。その虚実と付ひ来き。そのち事と決と下。韓嵩のころ。それ聖人の節を達と。そのほだの節と守る某の節と守るものあり。君臣のく定ぬるふあり。死とのつと節と守る。まは命とるもあり。火と踏湯を入とゆ。と辞さると。將軍の上天子はま。と下。曹操をま。とひのく臣も安んぬ。御も疑ひと懐と。

某と都よのむせむひと。天子万某は官爵とて。某の漢の臣とあり。將軍の故主とある。まうと。君は在る君の為ま。と古の言はま。と。天子の命と受と。その本義將軍の御為とあ。とあ。と。思案とめ。劉表き。別。高輪あり。你と中。都よのれ。これを韓嵩をむ。と。都よ上り朝と出と貢物と。これを曹操對面と。す。紹と。侍中零陵の太守と封と。又荆州と。首。或は。と。韓嵩が来り。都の虚実と。今ある人の功も。高官と。授けむ。と。稱衡が音信も。荆州へ。と。曹操。笑と。稱衡あり。我と辱む。と。荆州へ使せ。

劉表羊^子と借^りと。まろきんと何^んと再び問^ふとせんとしひれを
 諸人^をふとの高^き論^をは彼^を韓^嵩高^へ荆州^{より}なり。劉表^は人^を都^に
 の盛^ん人^{ある}すとと決^り御子^{一人}朝廷^に仕官^{させ}と人^質と一^のと
 るとと^の曹操^も疑^ふととありと。この國^のつら長^くあるといひ
 くれ^を劉表^大といり^り你^ニあり。斬^つとせんとし^りの韓^嵩さけぞ
 ち^の將軍^をととせ^り其^れ練^ととき^かい^を其^れさ^る將軍^を
 くとと^は崩^良ま^まとと^を劉表^と練^め韓^嵩い^ぬ都^に上^りと
 と^れ再^三の事^とと^り今^さ二^人と^いひ^やと^いひ^れを劉表^を
 ぐ^は死^罪二^等と^のと^り獄^中と^と人^をと^りと^れ江^夏す^る人^未
 り。稱^衡と^と黃^祖と^と劉表^決ひ^とと^の仔^細
 細^と問^ふと^り黃^祖と^と稱^衡と^と酒^と飲^とむ^にあり

む^は醉^らる^る黃^祖問^ふと^り御^邊都^にありと。誰^人と英^雄と
 む^は稱^衡答^ふと^り大^見孔^文舉^小兒^揚德^祖の^二人^の不^う
 む^は人^と思^ふと^のい^ふ黃^祖曰^くと^りホ^とと^り稱^衡曰^く御^邊
 辺^の社^の中^の神^に似^り人^の祭^と受^るとい^ふと^りあ^んの^靈驗^は黃^祖
 祖^大とい^ふと^り你^をと^り土^人形^とと^りと^り引^生と^り折^せ
 り^と稱^衡死^さる^まと^り言^りと^りと^り決^りれ^を劉^表衣^る
 あ^んと^り遂^に死^とと^り兇^惡洲^に墓^をむ^らと^り曹^操
 從^ひと^り曹^操都^にありと。稱^衡と^りさ^るは^ととき^に大^に笑^ふ
 川^とや^りさ^るを^と腐^り儒^者の^癖と^り己^が舌^は劍^{あり}口^は
 ら^ん死^とと^り志^くれ^ど劉^表が^使と^りこれ^をの^僭と^り
 きて^とと^り大^軍と^り起^しと^り荆^州と^り破^れと^り殺^さる^る荀^彧

新編通鑑三國志二編卷之七

諫めしやるる表紹いぬ平服せと玄徳を徐州あり。是を
ときて東園をむのる。復の病と後より手足の瘡と先
よりがと。まの表紹と平げと。つたは玄徳と陳れそのち江漢
と伐む。一鼓と定まるといひる。曹操げも。とてや
まりりる。

曹操三勅吉平

車騎將軍董承の帝の血詔と受より。日杖をんと苦しめる。
とと計とむむと。曹操とあると。あつみする。宗と頼と
る。玄徳馬騰の都と生去。王子扱ホといそる。計とむ
む。死やうする。是のとき。月日と送る。帝の宸襟と
安めはる。と。寢食とむる。建安四年の暮と。

あかみの春立ちりぬ。百官とて。禁殿と出。朝賀とほる。
曹操獲り。大臣とろる。公卿と無礼とをいやく。口惜たる。
あつひ。あまより。氣の病とあり。と一度伏し。起ざり。帝の
す。とや。めされ。典藥の大醫と勅。と療治とむ。と命せ
ら。太醫吉平とや。ま。と。洛陽の人と。世は秀なる名醫
あり。詔勅と受。董承が家。行。藥ととのへ。あ。と。日
よ。志たが。と。効と得。と。董承が常。苦。と。長嘆
ま。と。吉平の中。と。あ。と。思ひ。正月十
五日の夜と。上元の佳節と。あ。と。出。と。董承の傍
の人と。酒と飲。と。酔と被。と。眠入。と。日比。と。事
と。計。と。王子服。種輯。吳碩。吳子蘭。と。来。と。事。と。

けむとて衣帯の血帯とせしめてやうらうら我まてとよ力のくんと決
 らぬ計とせむらまねの女徳馬騰都の内と出れをむとせむと
 べん計る日根あへどむらむくのとく氣の病とあまり吉平
 やらぬ兎角計とせむら武具と動りまこととめらひば曹操とあ
 まと果て手の中あり董承が白くいうかめゆぞ吉平や
 らる曹操常は頭風と病の起るといふその痛骨髄は入る
 も果てやと薬ととの入る心か如此とあむ二眼の毒薬とめらひて
 立不ぬらうとんあんど兵と備へかまいとと菊董承が白り
 志うるといへ漢の天下と中真とるとい御辺一人の功るる吉平が
 曰く御心と安んぶとまらぬ人彼が病の幾るといぬち殺して天下の
 殃と除んとめらひ利をて回るとら董承の内りたりとてあむ

起る後堂へ入るる女の秦慶童不のらけぬと雲英とい
 ると女といとら私謀と居るとえと大いりそ秦慶童と
 ころとんとと夫人あまんと命と請むる谷と平棍とて一問を
 ろぬ人あ入るる秦慶童痛く打きると恨んとぬ中鎖
 とねきまて埃と蹴くとち丞相の府へ行天とと訴へんと
 いひれを曹操志むるをよむととつうう尋ね問ふ秦慶
 やらぬまの日比王子服呉子蘭種輯呉碩ホひと董承
 家にあつたりととと教とるいふら丞相と殺しなむとの
 巧るる董承又縮と六ときりて人の名字とせむらと
 かんてり近ぶる大医吉平が指と咬むぶりと誓言とあしめる
 むあやしむらととひひとといひらむを曹操大に驚た你まも



まのいひとさうせう。他日の恩賞を望まば下とす。とて。府中へ蔵へおたろ。董煎へくふと。要するもさうだ。奴を定て他國へ送去ぬえと。あひつら。とて。食致もせざらる。天運のなご。と。あさは。つぎ。次の日曹操俄く持病の頭風あり。すると沙汰し。吉平と召寄例のどく薬を調し。吉平は。は。す。す。た。り。や。ら。び。毒薬と。懐ふ。い。ま。も。と。府中。の。ゆ。え。見。ま。だ。曹操床のうへ平臥せり。吉平自ら毒薬と煎り定め。一服よと。持来れ。曹操の毒のり。と。あ。り。と。あ。へ。と。扱。吉平。ら。の。内。は。も。く。扱。あ。へ。と。汗。出。を。立。不。快。から。ん。と。い。ひ。れ。曹操。曰。く。你。の。と。す。儒。書。と。読。さ。だ。め。と。禮。義。と。さ。ら。ぬ。と。い。わ。る。は。吉平。や。ら。る。人。と。

とわ。禮義と。あ。ら。ざる。もの。ひ。ん。曹操。曰。く。君。疾。あ。つ。と。た。臣。ら。も。と。と。薬。と。試。と。父。疾。あ。つ。と。た。子。ら。も。と。に。薬。と。試。む。ま。古。今。定。み。る。禮。義。を。り。你。も。ん。と。あ。の。薬。と。試。と。す。と。と。す。と。と。吉平。さ。ら。と。き。ひ。と。色。と。失。あ。ひ。お。れ。ま。と。の。薬。あ。り。何。の。試。と。と。い。ん。と。い。ひ。ら。ら。ん。中。よ。と。計。の。渡。ら。と。快。り。な。れ。と。曹操。曰。く。耳。と。獨。り。で。毒。薬。と。と。ぐ。ん。と。仕。ら。推。倒。され。と。起。ん。と。さ。と。諸。人。を。お。つ。ま。り。縛。こ。け。ら。曹操。や。ら。る。我。と。ま。病。を。你。と。試。と。ん。と。あ。の。詐。り。と。く。の。と。と。強。く。杜。ん。と。獄。卒。千。人。と。え。と。吉平。と。後。園。を。引。出。させ。倒。れ。縛。り。と。拷。問。せ。ん。と。吉平。あ。へ。と。畏。や。ら。ら。る。顔。を。常。の。ど。曹操。亭。上。に。坐。し。と。笑。と。や。ら。ら。る。と。你。の。医。者。の。身。と。ま。

門は出のさうらふに他人のまゝめよすつと。我と害せんと巧む
 るべし。その本人とよまはし「生さば命と助さへ。吉平叱と
 せん。君と欺むた上と僭せる逆賊あり。天下の人とてい
 你が肉と啖んととわらさ。ちんぞ我一人のまゝえ。曹操再三人
 ときえんといひしれを吉平怒りと口をき。你と誅せん。今ま
 ぞ你は従えり。何くんぞ他人のまゝめよすつ。今さうらふ
 りつち死めり。げりあり。曹操大に怒り。獄卒と下知し。い
 打せられども。吉平さま。いも号ぶ。さうらふ。二肘あり。責められ
 肉さけやぶき。血るがき。泉のど。曹操打殺し。あゝありん
 とあゆひ。志やう責とさ。並次の日。群臣は酒宴とまゝせん。と
 招たれども。董承一人病と号し。とまぢらむ。王子服亦四人の疑

いきてんしとを畏れ。百官と一同に来れり。曹操後堂まぐ。さまぐ
 持成半酣。いちりり。今日の座席あり。興るひ不
 ど。旁の為に笑と催し。酒の酔と醒させやさんと。例のも
 の引来をといひ。まぐ。二十人の獄卒とも。吉平の頸枷と入。階
 トのひれをく。曹操やん。各官の者とありの。西堂の
 んとあいせ。朝廷よとむ。と。殺さんと巧し。天より吉平
 ひて。我まろくのどく囚れり。た。今あま。彼が白状をき。へ
 と。獄卒は命と。さんぐ。打せられ。吉平昏絶し。息を
 えん。水と面よ。た。ま。バ。ち。生。出。眼。といふ。牙とく。ぞ。
 曹賊をま。殺。と。あま。待。と。四。曹操。白。苦。
 く。本。人。と。さ。出。せ。あ。は。你。と。宥。さ。へ。吉。平。号。ん。ぞ。や

乃るハルガころ王莽ニ起事有ると黄卓ニ告げたり。天下皆
 尔と殺さんと願ふ者あは一人是のどてあらんや曹操大に怒
 り。えとめハ七人尔と加て八人あんとひんまをて王子服ハ四人是
 ときひと互いハ面と見あせ針の毡ニ坐する地と膽魂ハ身
 又ハ志曹操機卒と下知しつす責と水とを絶る事
 救ふるべしと全く畏る気色あたりし。まんの責とあ
 させ坐と起て内ニ入使者とつと百官を御よりハ王子服
 呉子蘭神輔呉碩四人ハあとは雷りハ松宴と設けり持成
 んとひんれを百官とてぐく入まどハ四人ハ回るとを理も
 天ニ飛ぬるハあいにど居る良ありと曹操立生問て
 乃るハ御辺達とともむるも別事ハあらば四人ハはらハ董承が家

乃の門まりと何事と巧とあひと王子服答て曰はるはあまの
 とう巧むべた。た平生の物訣りとあせり曹操が曰く縮は書たり
 しのあまもど王子服が曰はるのうらんとあはば曹操やハ御辺
 まどとらつ。知さざるとと事ハ仔細を明白あする者あり封
 面と中とそ彼秦慶童とよび出ハるまハ王子服あどらひとヤ
 乃のハ你あまとととあま来する秦慶童が曰く你ハ詭つとあ
 む。六人一處はありと義状ハ名字と書る事とをむあはらうハ好
 り。王子服やハあまのとのハ董承が妾ハ密通していつて責とら
 けひとらハ逃むと主人と誑言ハ有ハあぬとと丞相ハ詭
 たハ人ハ丞相ハ信ハなすべか。曹操がいつく
 吉平とつと。のむと母ととむるの計董承が所為ハあらば

と。難^{これ}あらん王子服^{ついで}あど知^しざるといひはれを曹^の操^{さう}曰^{いは}く今^{いま}よひ
 の白^{しろ}状^{じやう}せむ你^{おん}が命^{いのち}と宥^{なだ}さんるや外^{ほか}よりあらざるを
 忍^{しの}む難^{がた}義^ぎ三^{さん}族^{しゆく}ふむや早^{はや}ふ白^{しろ}状^{じやう}せよ王子服^{ついで}おあ
 むの軍^{いくさ}とあひひけむ曹^の操^{さう}たふら。武^ぶ士^し命^{いのち}と。やう四人
 と獄^{ごく}ふらさしむ

繪本通俗三國志二編卷之七終

